



Title	謝辞 (acknowledgment)
Author(s)	木村, 和保
Citation	「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集, vi-vii
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53489
Type	proceedings
Note	ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催：北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催：グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力：駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
File Information	vi_kimura.pdf



[Instructions for use](#)

謝辞

私が祖父ブロニスワフ・ピウスツキを知ってから三十年余りになります。没後半世紀以上経ってからの遅いのか、遅くないのかは分かりませんが、私にとっては、父の死後約十年が経過したこともあって、極めて新鮮な出来事だったのは間違いありません。結婚して間もない妻も、さぞ驚いたことでしょう。北海道の一般僻地出身の私は、近代史にかかわるような親族がいるなどとは、夢想だにしておりませんでした。

祖父のブロニスワフが誕生した 1866 年は、日本では坂本竜馬が活躍するまさに幕末期に当たりますが、この時代をめぐっては小説やドラマや映画などが、今なお新解釈を提示して世間をにぎわせております。同時代の世界では西欧の帝国主義列強が、アフリカやアジア等の支配権をめぐって鎬を削り、植民地争奪戦にうつつを抜かしておりました。この激動の時代は日本でも世界でも、その結果が今に至るまで尾を引いています。ブロニスワフの人生を激変させた 1887 年のロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件の頃、日本では伊藤博文が初代内閣総理大臣でありました。学生時代以来、歴史などさほど気にもしていない私でしたが、この時代には改めて思いを馳せずにはおれません。

誰しも青春時代は、純真で正義感にあふれ、血気盛んで、不条理・理不尽なものは受け入れられない時期だと思います。ブロニスワフもその一人であった、と私は考えています。いつの世もそういう事の繰り返しではないでしょうか。暗殺未遂事件にどれほど関与したのかは分かりませんが、とどのつまりは死刑から有期刑に減刑されました。なんと幸運なことでしょう。

私と従姉妹は NHK 取材班に同行して、ソ連時代のサハリンを訪れる機会がありました。そしてブロニスワフの足跡をたどりました。初の監獄の地リュコフスコエ、アイヌの人たちと初めて出会ったコルサコフ、そして恋に落ちたアイ村などを訪ねたときは、深い感慨に襲われました。

彼の業績は、帝政ロシアの学術機関から原住民研究を要請され、その成果を論文としてまとめ、また色々な民族資料を収集・整理したものと理解しております。

私が今も鮮明に記憶するのは、ポーランドの山奥にある彼の旧居の屋根裏から発見された、蠟管をめぐる報道に接したときの感激です。なにしろあのエジソンの開発した蓄音機が、往時の少数民族の肉声を記録しているわけですから、学問的にも貴重な資料であるに相違ありません。そして音声の再生や解析に日本の最先端技術が駆使されることにもいたく感動しました。

長年にわたるピウスツキ研究の結果として、ブロニスワフは二葉亭四迷、大隈重信、横山源之助などの著名人、また孫文や宋教仁など中国人革命家とも親しく交遊した事実が判明しています。これは、日露戦争に勝利した日本に対する、亡国ポーランドの再興を模索するロビー活動だったのでしょうか、あるいは自らの学問的責任に発する少数民族支援の政治活動だったのでしょうか。その具体的意図は判然としませんが、彼はどうやら一介の民族研究者であるだけでは収まらなかったようです。

ピウスツキが妻子をサハリンに残して、ヨーロッパへ去ったことは紛れもない事実です。それに対して「あなたは、彼を憎んでいませんか」という質問を受けたことがあります。私はこう答えます。「全然憎んでおりません。なぜなら、私が今こうして生きているのですから……」と。

妻とその子供たち（祖母と父と叔母）であれば、答えは全く違うと思いますが。その時代に生きた人たちは、(いつの世もそうだと思いますが) 義理と人情の狭間で生きてゆかざるをえなかったでしょう。

ヨーロッパに戻ってからも、祖父はポーランド建国の父といわれる実弟ユゼフ、その弟の反対勢力、そしてポーランドを取り巻く列強との調整に最後まで腐心したに違いありません。

ブロニスワフ・ピウスツキに関する研究は三十年以上にわたり、国際的に展開されてきました。その間に開催された三回（1985年札幌、1991年サハリン、1999年ポーランド）の国際シンポジウムでは、極めて多彩な研究成果が発表、討論されました。私はそのいずれにも参加させていただきましたが、その都度、祖父の偉大さを発見し、確認するのです。その際はまた国内外を問わず、色々な方とお会いする機会にも恵まれて、私の人生観もいささか変わったように思います。

この度のピウスツキ顕彰事業がポーランド政府の発議で着手されたことは、長年のピウスツキ研究にとっても、またわれわれ遺族にとっても、画期的な「事件」であります。私個人としても、海外のピウスツキ縁者と一緒にこの事業に参加できることは、この上ない喜びであります。祖父本人も草葉の陰から、この予想外の展開に、さぞかし喜んでいることであらましよう。祖父はまた己の胸像が、1903年の夏に胸襟を開いて付き合ったアイヌの人たちの土地、ほかならぬ白老に建立されることにも、きっと心からの喜びと同意を表明するものと思っております。

ブロニスワフ・ピウスツキをめぐってこれまでに展開された研究活動、その成果、そしてそれに伴う交流は、今後の学術研究に活用されるばかりでなく、ポーランドと日本の関係促進にも寄与することを願ってやみません。

なお、ブロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業や、祖父とその仕事の研究に携わってこられた井上紘一北大名誉教授、村崎恭子前北大教授、山岸嵩・元NHKチーフディレクター、澤田和彦埼玉大教授、A.F.マイエヴィチ・アダム・ミツキエヴィチ大教授、また親類でもあるヴィトルト・コヴァルスキ氏をはじめとする国内外の研究者、そしてこの顕彰事業にかかわられたポーランド政府関係者、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」、北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター、ならびに多方面で御協力いただいた方々や団体には、皆さまから賜った御厚情に対して、ピウスツキ縁者を代表し、この紙面をお借りして感謝申し上げます。

最後に、皆さま方の今後の御健勝と御活躍を祈念いたし、御挨拶とさせていただきます。

2013年9月24日

木村 和保